エッセイ

世界へ 世界から

動物園の本質とは

小菅 正夫

昨年度の入園者数が、二〇六万人を超えた。旭山動物園としては信じられない記録である。わたしが園長に就任した翌年には、過去最低の一二六万人を記録したのだが、それはほんの一〇年前のことである。「日本でいちばん北にある小さな動物園が、どうしてこんなに人を集めるのだろう」という疑問がわき上がり、多くの人にさまざまな角度から分析されているようだ。わたしも、同様の質問を受けることがあるが、答えようがない。なぜかというと、われわれは入園者数二〇〇万人達成を目標としてきたのではないからだ。

動物園という聞き慣れたことばに、皆さんは何をイメージされるだろうか。「めずらしい動物が見られる場所」くらいだろうと思う。われわれ動物園人も、「自分の動物園にしかいない動物」を自慢してきたことも事実である。しかし、二一世紀を迎え、動物園向けのめずらしい動物が発見されるはずがないことは誰もが知っている。それよりも、絶滅が心配される動物種が増加の一途をたどる。動物園人は、「動物園こそが希少動物保護増殖の能力をもっている」「野生動物を絶滅から防ぐため、動物園は彼らの生息環境の保全について教育することができる」「絶滅に備えて、細胞を凍結保存する冷凍動物園も必要だ」など、動物園の使命を教育、研究、自然保護にあると強調し始めた。

ここで、皆さんの抱く動物園像と、動物園人が描くそれに大きなギャップが生じてきた。前記三つの使命へ突き進む動物園へやってきた普通の観客は、動物園の役割について反対はしないものの、「危うい地球環境について学ぶために動物園へきたのではない」という気持ちを抱いてしまうのではないだろうか。というのは、動物園全体の入園者数が長期的に減少してきてしまっているからだ。

もしかしたら、動物園って楽しい場所なんだってことを動物園人が忘れてしまったのではないか。楽しいことが悪いことなのか。二一世紀の動物園は野生動物を守るために存在する。どうやって？　われわれはそこを考え抜いた。動物園の最大の使命は、多くの人びとに野生動物の素晴らしさを実感してもらい、野生動物の窮状を訴え、自らが野生動物を守ろうという気持ちにさせることなのではないか。

そこで、われわれは環境エンリッチメントの手法を用いた行動展示を開発し、野生動物が進化の結果獲得した特徴ある行動や能力を展示することで、動物の魅力を伝え、動物園にしかできない自然保護活動を展開しようとした。その結果として前述した入園者数となったのではないかと考えている。ただし、現状はまさにバブルであり、今後は徐々に減少傾向を示しながら落ち着いてくるだろう。それが何万人であるのか、やはり誰にもわからない。

こすげ　まさお／1948年、札幌市生まれ。旭山動物園園長。北海道大学獣医学部卒業後、旭川市旭山動物園に入り、1995年園長に就任。水中トンネルでペンギンの遊泳を見せるなど、独特な演出で注目される。著書に「旭山動物園長が語る命のメッセージ」（竹書房）「「旭山動物園」革命―夢を実現した復活プロジェクト」（角川書店）などがある。

月刊 みんぱく

目次

JULY2006
月刊みんぱく 7

01 エッセイ　世界へ世界から
動物園の本質とは
小菅 正夫

02 特集 ケータイ
ケータイ文化人類学の可能性
藤本 憲一
モンゴルの「あんた誰？」
島村 一平
トン族で大流行
兼重 努
ベトナムの連絡道具
榎永 真佐夫

ケニアのケータイ活用術
石田 慎一郎
バングラデシュのケータイ婚
南出 和余
ろう者とメール ―カメルーン―
亀井 伸孝

08 未来へひらくミュージアム
危機の時代の博物館と研究者
―身を削ること、人と仲良くすること―
森田 利仁

11 表紙モノ語り
コンゴ東部の伝達用太鼓
梶 茂樹

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
中国のアフリカ人ビジネスマン
三島 禎子

15 時論・新論・理想論
米山俊直先生を偲んで
中牧 弘允

16 外国人として生きる
「フィリピン」と「日本」をつなぐ親子
永田 貴聖

18 地球を集める
アボリジニ社会をコレクション
小山 修三

20 生きもの博物誌
キャッサバを長持ちさせる
安高 雄治

22 フィールドで考える
ジンに憑かれた
ベルベルの助産婦
井家 晴子

24 企画展
「みんぱく昆虫館」
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ